

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年6月17日

ファイヤーファイターたちの熱血

ひよんなきっかけで、消防士さんの意見発表会の審査員を務めました。正式には「第45回全国消防職員意見発表茨城県大会」というものものしい名称がついているらしい。

消防職員をしている教え子のI君から1月に連絡があり、「学識経験者」として審査員を打診されました。「いや、オレは“ガク”も“シキ”もないから無理だよ」と断ったところ、I君が「先生、それは形だけです。ガク”も“シキ”もなく大丈夫です！」と力強く請け合うので、そういうことなら、と引き受けることにしました。

コロナ禍の中で、エッセンシャルワーカーということばを頻繁（ひんぱん）に耳にするようになりました。エッセンシャル（essential）には「絶対必要な」「欠かせない」などの意味があり、エッセンシャルワーカーとは、医療従事者や、食料品・日用品の販売業者、電気・水道・ガスなどのインフラ業者など、私たちが普段の生活をおこなっていくうえで必要不可欠な職業に就いている方のことです。

火災が発生すればすぐさま消火に出動し、病人やけが人を迅速に医療機関に搬送する消防士の方々は、もちろん私たちの日常を支えるエッセンシャルワーカーです。

上記大会ですが、通常は、発表者が一堂に会し意見発表を行い、その場で直接審査をすらしいのですが、コロナ感染拡大防止のため発表会は実施せず、原稿と発表の様子を撮影したDVDを送るのでそれを観て審査してほしい、ということでした。ほどなく発表者23名の原稿とDVDが送られてきました。

原稿を読み、DVDを観て、まず驚いたのは消防士の職務の多様さでした。火災の消火活動、病人・けが人の救急搬送だけでなく、地域の防災訓練・学校の避難訓練への協力、水難事故の防止や救助、地震災害への備え、その他防災に関する啓発活動など、消防士の方々はさまざまな取り組みを行っています。日頃からいざというときのための訓練を欠かさず、地域の消防団や自治体などとも連携をしながら、見えないところで社会を支え、私たちの安全を守ってくださる消防士の方々の奮闘努力を知り、月並みな表現ではありますが、頭のさがる思いがしました。また、発表者となった23名の消防職員の皆さんの、職務にかける熱い思いと責任感、きびきびとした爽やかな立ち居振る舞いに感動しながらDVDを観させていただきました。

5名の審査員による厳正な審査の結果、今回の意見発表会茨城大会で1位を獲得し、全国大会代表となったのは、常総地方広域市町村圏事務組合消防本部に所属する宮田兼太さ

沖縄返還50年に思うこと

1972年（昭和47年）5月15日、筆者は小学2年生でした。その日、担任の徳宿英子先生が「皆さん、今日、戦争でアメリカにとられていた沖縄が日本にフッキします。よかったですね」と話をされました。

この場面を覚えているのは、当時、「フッキ」という言葉の意味を知らずに、いぶかしんだ記憶があるからです。とられていた沖縄が「フッキ」ということだから「返してくれる」という意味だろうか？それにしても、そもそもアメリカが沖縄を「とる」とはどういうことだろうか？まあ、先生がよかったですといっているのだから、きっといいことには違いない、というようなことを考えていたような気がします。小2の筆者にとって、沖縄は遠い空のかなたにある見知らぬ土地の名前にすぎませんでした。

筆者が初めて沖縄を訪れたのは、1975年の冬、沖縄国際海洋博覧会が開催されているさなかでした。小学校の教員だった父と二人で、おそらく学校の教員の共済か互助会のツアーを利用した旅行でした。同じツアーに、東京で先生をしているというおじさん、おばさんのグループがいて、小5のシャイボーイを「茨城のぼくちゃん」と呼んでかわいがってくれました。家族の中で、なぜ父と自分だけで旅行に行ったのかはわかりませんが、おそらく経済的な事情だったのだろうと思います。

沖縄海洋博は、1975年7月から翌年1月にかけて開催された、沖縄の日本復帰記念事業でした。海に浮かぶ人工島アクアポリスや、イルカのオキちゃんのショーなど海洋博を堪能（たんのう）した旅行最終日、ツアーは沖縄南部戦跡を巡りました。そこで初めて見聞きした沖縄戦の凄惨な事実、筆者は大きなショックを受けることになります。「今、わたしたちが通っているこの道を（おそらくは国道331号線、糸満市付近）、傷ついた日本の兵隊さんや沖縄の人たちが、アメリカ軍に追われ、南へ、南へと逃げていきました。包帯をまいた傷口からはウジがわいていました・・・」というバスガイドさんの話、ひめゆりの塔でのぞき込んだガマ（洞窟）の暗さを今でも覚えています。

太平洋戦争末期、激しい戦火が沖縄を襲いました。沖縄本島中部に上陸した米軍を日本軍が迎え撃ち、日本で唯一行われた地上戦で、民間人を含む20万人を超える人命が失われました。90日におよぶ戦闘で沖縄県民の4人に1人が亡くなったとも言われています。

1945年8月、日本がポツダム宣言を受諾、無条件降伏を受け入れて戦争は終了します。1952年のサンフランシスコ講和条約により日本は独立を回復しますが、沖縄は本土から切り離され、その後もアメリカの施政下に置かれました。冷戦下、太平洋と東シナ海の境界に位置する沖縄は、中国やソ連（現在のロシア）をにらむ重要な軍事拠点であり、多くの米軍基地が置かれました。ベトナム戦争では米軍爆撃機B52が、北爆を行うため沖縄を飛び立っていきました。返還までの27年間、沖縄は、強制的な土地収用、米兵による殺人・暴行事件など、米軍の「圧政」に苦しむこととなります。1950年代半ばから60年代にかけて、日本は高度経済成長時代をむかえ、人々の生活は急速に豊かになっていきましたが、アメリカ施政下の沖縄は経済発展から取り残されました。

沖縄返還は、1968年に就任した3人の政治家、ニクソン米大統領、佐藤栄作・日本国総理大臣、屋良朝苗（やらちょうびょう）・琉球政府行政主席らによって進められました。沖縄に配備されたアメリカの核兵器を撤去し、本土と同じく平和憲法のもとでの施政を沖縄に実現するという、「核抜き・本土並み」という日本政府の方針のもと返還交渉がおこなわれましたが、重要な軍事拠点である沖縄の基地縮小にアメリカは難色を示しました。日米安保条約を結んでいた日本（本土）側にも、沖縄の基地存続を望む声が少なからず存在したといえます。

1972年5月15日、沖縄は広大な米軍基地を残したまま日本に返還されました。雨の中、那覇市民会館で行われた沖縄復帰記念式典のあいさつで、沖縄初代県知事となった屋良朝苗氏は「復帰の内容を見ると、必ずしも私どもの切なる願望が入れられたと言えないことも事実だ」と述べました。式典会場に隣接する与儀公園では「基地のない平和な島」への期待を裏切られた人々による抗議集会が開かれていました。

琉球政府職員だった平良亀之助さん（85）は当時をふり返って、広報係長として式典を見守りながらも隣の抗議会場から聞こえてくるマイクの声に気をとられ、「私もあの場にいるべきなのに・・・」という思いを禁じ得なかったと語っています。（読売新聞2022年5月15日）

戦後、本土の米軍基地が整理縮小されていく一方で、返還後も沖縄の基地縮小は進みませんでした。現在も、日本の国土の0.6%に過ぎない沖縄に在日米軍施設の約70%が集中しています。人々の日常と基地が隣りあう沖縄では、騒音被害や事故の危険性が常に身近に存在します。日米地位協定は、米兵が犯罪をおかした場合でも日本の法律で裁くことを妨げています。1995年、3名の米兵による女子中学生暴行事件が起こり、沖縄全土が怒りにふるえました。

翁長雄志・前沖縄県知事はかつて「日米安保条約と日米地位協定のはざままで生活せざるを得ない県民に、憲法が保障する自由、平等、人権、民主主義が等しく保障されているのか」と疑問を投げかけました。（毎日新聞2022年5月15日）日米同盟による利益を日本全体が受ける一方で、沖縄だけに過重な負担を強いる、その構造的不平等を見て見ぬふりをしている私たちに、この言葉はあらためて突きつけられています。

「世界一危険な飛行場」と言われる普天間航空基地の移設を巡っては、日、米、沖縄のさまざまな思惑が交錯する中、いったん浮上した県外移設案は頓挫（とんざ）してしまいます。日本政府は沖縄県名護市辺野古の沖合を移設先とし、埋め立て工事を開始しました。2019年には辺野古沖埋め立ての賛否を問う県民投票が行われ、72%を超える反対の意思が示されましたが、日本政府の方針に変更はありませんでした。辺野古を巡る日本政府と沖縄の対立は深まり、両者の対話は失われたままです。

沖縄日本復帰50年にあたる5月15日、「沖縄復帰50周年記念式典」が沖縄市宜野湾市と東京をつないで開かれました。5月にしては肌寒い日曜日の午後、筆者はNHKのテレビ中継をぼんやり見るともなく見ていました。岸田総理、玉城沖縄知事の式辞が述べられ、オンラインで東京から天皇陛下のお言葉がありました。岸田、玉城両氏のスピーチ

に「辺野古」の文字は含まれていませんでした。

その後、閣僚らによるテンプレ的なあいさつが続く中、沖縄県民代表として高良政勝さん（82）がスピーチに立ちました。対馬丸記念会代表理事を務める高良さんは、対馬丸事件の生存者の一人と紹介されました。

対馬丸事件とは、米軍の沖縄上陸が迫る1944年、本土への疎開のため1600名あまりを乗せ沖縄を出航した貨物船対馬丸が、アメリカの潜水艦の魚雷で撃沈された事件です。子どもたち780名を含む1476名が犠牲となりました。当時4歳だった高良さんは奇跡的に救助されましたが、家族11名のうち助かったのは高良さんと姉の2人だけでした。

高良さんはスピーチの中で対馬丸事件に触れ、「今も世界では報復の連鎖が子どもたちの夢と希望を奪っている。この報復の連鎖を断ち切る努力を一人ひとりがすることが、対馬丸の子どもたちから指し示された課題ではないか。今、この瞬間にもウクライナでは多くの子どもたちが命や家族を失い、夢や希望を奪われている。50年前、私たちが望んだ沖縄県はまだ道半ば、沖縄が世界平和の発信地となることを願う」と述べておられました。

式典の最後、那覇高校合唱部の生徒たちによる沖縄民謡「ていんさぐぬ花」の合唱がありました。澄んだ歌声とどこかせつない調べに、沖縄の青い海と空が思い浮かぶ気がしました。

5月16日の朝日新聞に「平和になりたい 50年前の詩」という記事がありました。当時、沖縄市の小学5年生だった河野立子さんの詩「私のねがい」が、1972年5月15日の朝日新聞に載ったことを紹介する記事でした。詩の一部を引用します。

「毒ガス／ばく音／ひきにげ／B52／苦しかった沖縄

復帰で／沖縄はほんとに／すくわれるのだろうか／沖縄には／日本復帰で／平和になりたいという／強い強い願いがある

日本人々よ／それに答えて／沖縄を／平和な県にしてほしい」

沖縄返還から50年。50年を経て複雑にからんだ糸をときほぐすのは容易ではありません。しかしその努力をあきらめてはいけない、と強く思います。沖縄を苦しめ続けてきたのは、私たち大和人（ヤマトンチュー）の、沖縄の問題を他人事として見る目、無関心だったのではないのでしょうか。

返還50年の節目の年、沖縄は6月23日に77回目の戦没者慰霊の日を迎えます。